

113 學年度第一學期 Eurasia 基金會 (from Asia) 國際講座
第七期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(9)

講題：蔣介石と日本—『以德報怨』演説の史的考察—

家近亮子教授

(2024. 11. 14)

要旨

今回の授業では、まず蔣介石の生涯および彼に対する中国、台湾、日本での評価について探討し、その後、蔣介石の「以德報怨（怨みに報ゆるに徳を以てす）」という演説を取り上げて評論する。

明治維新以降、日本はアジア諸国にとって学ぶべき対象となった。欧米への留学より費用が安く、ビザも必要ないため、明治政府は 1901 年から留学生を受け入れ始めた。特に、1904 年の日露戦争以降、中国人の日本留学者数が急増し、彼らが最も学びたかったのは軍事、経済、科学、医学だった。蔣介石は幼い頃から海外で軍事を学びたいと考え、1906 年 4 月から 12 月まで日本の清華学校に通い、1908 年から 1910 年には振武学校で学んだ。合計約 5 年間の留学期間中に、中国同盟会に加入し、反清革命活動に参加した。蔣介石と彼の母親そして最初の妻は熱心な仏教徒だったが、1930 年に宋美齡との結婚がきっかけでキリスト教徒に改宗した。

辛亥革命後、孫文は蔣介石を黄埔軍官学校の校長に任命した。その後、蔣介石は中国国民党軍事委員会の主席、国民革命軍の総司令官として、北伐軍を指揮し中国統一を目指した。1948 年には中華民国の総統に就任し、1949 年には台湾に移った。

中国における蔣介石の評価：蔣介石は反共主義者であり、台湾移転後も大陸反攻を主張した。中国共産党は、抗日戦争は共産党が主導したと主張し、1931 年の満州事変で蔣介石が日本の侵略を黙認したと批判した。そのため、彼を全民の敵と見なしている。

台湾における蔣介石の評価：1949 年、蔣介石は台湾に移り、大陸反攻を主張しながら国民党の台湾統治を強化した。党禁、報道禁止、戒厳令などの政策を実施した。1990 年代に台湾が民主化した後、蔣介石の独裁が批判され、脱蔣化政策が進められた。

日本における蒋介石の評価：蔣公遺徳顕彰会は、1978年に「中正神社」を建立し、蒋介石が1945年8月15日の演説で「過去の悪を忘れ、怨みに報ゆるに徳を以てす」を対日政策の理念としたことに感謝を示した。蒋介石は、1945年8月15日午前、日本の天皇が日本の降伏を宣言する1時間前に、重慶のラジオ局を通じて全国および世界に向けて放送した《抗戦勝利告全国軍民及全世界人士書》において、日本国民も中国人民と同様に戦争の被害者であることを述べた。また、日中戦争は中国側の防衛戦であるとし、日中戦争を「8年抗戦」（盧溝橋事件以降）と定義し、「15年」（満州事変以降）とはしなかった。さらに、蒋介石はキリスト教の教えである「自分にするように他人にも接しなさい」や「敵を愛しなさい」と、中国民族の徳性である「過去の悪を忘れる」および「善をもって人と接する」ことを強調した。そして、「日本の軍国主義者を敵とみなすが、日本国民を敵とみなさない」「復讐を企てるべきではなく、無辜の民を侮辱することは断じて許されない」と国民に説明した。蒋介石は、戦後の中国が世界の国々と共に平和を築くことを提唱し、平等、自由、民主、博愛、互助の精神に基づいて中華民国の民主憲政改革を完成させることを目指した。

「以德報怨」という表現は、蒋介石の演説を聞いた日本のメディアが付けた見出しである。中華民国は戦後の日本に対して以下の四つの政策を実施した。

1. 日本の天皇制は日本国民自身が決定すること。
2. 列強による日本の分割を阻止すること。
3. 200万人以上の軍人・民間人を無事に日本へ帰還させること。
4. 賠償請求権を放棄すること。

家近亮子教授は、蒋介石が列強によって分割され、不平等条約を強いられてきた中国という国を、自らの軍事的・外交的手腕を通じて国際的地位を向上させ、国連の五大常任理事国の一つに押し上げたと再評価した。

最後に歴史は多面体のプリズムのようなものであり、光の屈折によって現れる色が異なるように、歴史上の人物に対する評価も多様で複雑な側面を持っているという。時代背景の違いによって、その評価も異なるのだと学生の諸君にお伝えした。

中国語要旨・まとめ 徐興慶

日本語翻訳 陳順益

2024.11.15